

不適切な養育が子どもに与える 影響と気づくポイント

小穴 慎二[†]第70回国立病院総合医学会
(平成28年11月12日 於 沖繩)

IRYO Vol. 71 No. 8/9 (352-355) 2017

要旨

不適切な養育が子どもに与える影響は、精神面、身体面、発達などさまざまである。さらに1998年に米国で発表された小児期の有害体験の研究 (adverse childhood experiences study) により、その影響は長期に及び、間接的にはいわゆる成人疾患である虚血性心疾患や慢性呼吸器疾患等のリスクも高めると考えられるようになった。そのために不適切な養育を早く見つけ介入していく必要がある。気づくポイントとしては、見えないものを視覚化する (making the invisibles visible)、疑い指数を高くする (high index of suspicion)、多機関・多職種連携 (multidisciplinary approach)、子どもを第一に考える (child first) があげられる。そして、われわれ医療者は、1. 不適切な養育は決してまれではなく、頻度は高い、2. 医師によって見逃されてしまうことがしばしばある、3. 「疑い指数」を高くしておかなければならない、4. 虐待が疑われる時は、報告 (通告) しなければならない、5. 詳細な問診と理学所見をとらなければならない、6. そして、すべてを記録する、7. 虐待を誤診してはならないということを理解しておかなければならない。

キーワード 不適切な養育、児童期の逆境的体験、疑い指数、多機関連携

はじめに

自分が小児科医になった約30年前には、教科書には「被虐待児症候群」の記載があり、Dr. Kempeの“battered child syndrome”が米国で話題となっていると教えられたが、その頃の多くの人は日本の文化では起き得ない事象だろうと考えていたのではな

いかと思う。当時勤務していた病院に「傷の多い乳児」が嘔吐を主訴に入院された。挫傷が多いのはなぜだろうと思った。まさか家族が身体的虐待をしていたとは思わなかった。しかし、その子はその数カ月後に重篤な状態で救急外来を受診された。「まさか」がおきたのである。その後も、急性疾患に対応する一般小児科勤務医として従事してきたが、虐待

国立病院機構西埼玉中央病院 小児科 [†]医師

著者連絡先：小穴慎二 国立病院機構西埼玉中央病院 小児科 〒359-1151 埼玉県所沢市若狭2-1671

e-mail: oanas@wsh.hosp.go.jp

(平成29年1月10日受付, 平成29年6月16日受理)

Be Mindful of the Influence of Inappropriate Child Rearing has on Children

Shinji Oana, NHO Nishisaitama-chuo National Hospital

(Received Jan. 10, 2017, Accepted Jun. 16, 2017)

Key Words: child maltreatment, adverse childhood experiences, index of suspicion, multidisciplinary approach